２年次

不登校児童生徒の多様なつながりを目指した支援に関する研究

－メタバースを活用した実践を通して－

教育相談室　矢野泰慎　川中亜紀子　冨田和宏
酒井綾　山﨑慶子　高橋信之
長谷部真由美　坪田朋也　中塚広樹
濱本沙和佳

【要　約】

メタバースを活用した支援が不登校児童生徒にとって有効な手段であることを確認できた。今後は、メタサポキャンパスを利用する児童生徒の安心感を更に高められるように、他者とのつながりや学習についての支援を充実させていく必要があることを確認できた。

【キーワード】　不登校児童生徒支援　メタバース　インターネット上の仮想空間

１　研究の目的

文部科学省が実施した「令和５年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果によると、令和５年度の小・中学校の不登校児童生徒数は、346,482人となっており、平成26年度から10年間で2.8倍に増加している。また、愛媛県においては、令和５年度の小・中学校の不登校児童生徒数が、3,475人となっており、平成26年度から10年間で3.1倍に増加している。学校内外の専門機関等で相談や指導等を受けることができていない全国の不登校児童生徒は134,368人であり、約４割の児童生徒がどこにもつながりを持つことができていない状況にある。こうした現状を踏まえ、文部科学省は、令和５年３月に誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策として「ＣＯＣＯＬＯプラン」を取りまとめた。同プランには「児童生徒が不登校になった場合でも、小・中・高等学校等を通じて、学びたいと思った際に多様な学びにつながることができるよう、不登校児童生徒の個々のニーズに応じた受け皿を整備する」ことが重要であると示されている。

愛媛県教育委員会では、こうした現状を踏まえて、令和５年４月１日から、本センターに愛媛県教育支援センター（以下「県教育支援センター」という。）を設置し、不登校児童生徒が他者とのつながりや学習の機会を持つことができるように、インターネット上の仮想空間（以下「メタバース」という。）を活用した支援であるメタサポキャンパスを開設した。メタバースを活用した支援は、ゲーム感覚での参加が可能で、学び等にアクセスしやすいことに利点がある。メタバースを活用した支援によって、不登校児童生徒が現状から一歩踏み出して、他者とのつながりや学習の機会を持ち、社会的自立に向かうことができるのではないかと考え、メタサポキャンパスでの支援に取り組むこととした。

本研究では、メタサポキャンパスを利用する児童生徒が他者や学習とのつながりを持つことができたか、また、そうしたつながりがどの程度であったかということに視点を置いて、メタサポキャンパスでの支援の効果を検証したい。

２　研究の内容

⑴ メタバースを活用した支援の概要

ア　支援の目的

メタサポキャンパスの支援の目的は、担当スタッフの巡回等により、不登校児童生徒との「つながり」を作り、個々の状況に応じた学習の機会を保障するなど、社会的自立に向けた支援の充実を図ることである。また、支援の充実を図ることを通して、メタサポキャンパスを利用する児童生徒が安心感を持って過ごすことのできる居場所を作りたいと考えている。

イ　使用アプリ

株式会社ガイアリンクが提供するメタバース「ガイアタウン」Team Suite80を使用することとした。「ガイアタウン」は３Ｄの空間で、より現実空間に近い仕様となっており、同時接続は80人まで可能

である。利用する児童生徒が、自身の分身であるアバターを、３Ｄ空間の中でリアリティーを持って自由に動かすことができる。また、学習動画の視聴や他のアバターとの会話、共同作業が可能であるなど、他者とのつながりを持って、多様な活動に楽しみながら参加できることも、このアプリの特徴である。

ウ　対象児童生徒

次の２点に該当する児童生徒を対象とした。

○県内の小・中学校等に在籍する児童生徒

○在籍校が、メタサポキャンパスでの支援が適当であると判断した児童生徒

エ　担当スタッフ

○県教育支援センター指導主事　４名（令和５年度は２名）

○キャンパスサポーター（愛媛大学教職大学院大学院生）　10名（令和５年９月から参加）

オ　児童生徒のスケジュール

メタサポキャンパスの開室時間は平日の９：00から16：00であり、長期休業中も利用が可能である。利用が可能な日については、本センターホームページに詳細を掲載し、児童生徒、保護者等に周知した。メタサポキャンパス内での活動は、児童生徒が自由に決定できるが、活動内容を自分で決めることができない児童生徒には、表１に示した基本のスケジュールを提示している。なお、基本のスケジュールは、午前、午後の２部制となっている。

表１　基本のスケジュール

時間（午前）	内容	時間（午後）	内容
9:00～10:00	フリータイム	13:00～13:30	フリータイム
10:00～10:20	スタートタイム	13:30～13:50	スタートタイム
10:20～11:00	イベントタイム	13:50～14:30	イベントタイム
11:00～12:00	チャレンジタイム	14:30～16:00	チャレンジタイム

カ　児童生徒在籍校との連携

児童生徒の在籍校に、月ごとの「活動状況等報告書」及び「学習状況報告書」を送付し、メタサポキャンパス内での児童生徒の出席状況や学習状況についての情報共有を図った。また、児童生徒の様子によっては、その都度、相互に連絡を取り合うなど、密に連携も図った。

⑵　メタバースを活用した支援の実際

ア　メタサポキャンパスにおける支援の視点

メタサポキャンパスを利用する児童生徒の状態を以下の三つの段階に区分して、他者とのつながり及び学習とのつながりについての支援の視点をそれぞれ検討した。

○第１段階

メタサポキャンパスの利用を開始してすぐの段階。

○第２段階

メタサポキャンパスでの活動に慣れて担当スタッフと交流できる段階。

○第３段階

メタサポキャンパスの活動時に他の児童生徒とも交流できる段階。

(ｱ) 他者とのつながりについての視点

○第１段階

この段階での支援の視点は、児童生徒が安心感を持ってメタサポキャンパスに入室したり、担当スタッフと信頼関係を構築したりすることにある。児童生徒との信頼関係を構築するために、担当スタッフは、チャット等でのやり取りの中で、児童生徒の話を受容的、共感的に傾聴し、肯定的な働き掛けを行うこととした。

○第２段階

この段階での支援の視点は、児童生徒がメタサポキャンパスに所属感を持って、自分のペースで

安心して入室できるようにすることにある。第１段階で示した支援を継続しながら、児童生徒が担当スタッフとの関わりを通して、また参加したいと感じられるようなイベントを行うこととした。

なお、イベントの内容を計画する際、可能な範囲で児童生徒の意見を聞き、実際の活動内容に反映させたり、イベント終了後に集合写真を撮影し、メタサポキャンパス内にその写真を掲載したりすることで、児童生徒がメタサポキャンパスに所属感を持てるようにすることとした。

〇第３段階

この段階での支援の視点は、担当スタッフや他の児童生徒との関わりを通して、児童生徒が他者と交流する楽しさを感じられるようにすることにある。担当スタッフは、児童生徒同士が自らきずなを紡いでいけるようなイベントを設定することとした。

(ｲ)　学習とのつながりについての視点

〇第１段階

この段階での支援の視点は、児童生徒が学習に興味を持つことができるようにすることにある。担当スタッフは、児童生徒から学習に関して興味・関心があることについて聞き取りをするなど、児童生徒の興味・関心に沿って働き掛けを行うこととした。

〇第２段階

この段階での支援の視点は、児童生徒が、学習動画を視聴するなどして、自主的に学習に取り組むことができるようにすることにある。ＩＣＴ教材「eboard」やえひめ学習動画プラットフォーム等を配置して、児童生徒が学習動画を活用して自由に学習できるようにすることとした。

〇第３段階

この段階での支援の視点は、児童生徒が、担当スタッフに学習についての質問をしたり、他の児童生徒と相互に交流したりしながら学習に取り組むことができるようにすることにある。アドバイスルーム利用した担当スタッフによる助言、キャンパスサポーターによるミニ授業での児童生徒の相互交流など、児童生徒が主体的に学習に取り組むことができるような支援を行うこととした。

イ　支援の改善に向けた実践

メタサポキャンパスでの支援の充実に向けて、児童生徒の他者とのつながりや学習とのつながりについての満足度、メタサポキャンパスでの安心感の度合いを知ることを目的としたアンケート調査を実施した。アンケート調査の概要は、表２のとおりである。

表２　アンケート調査の概要

年度	実施期間	集計期間
令和５年度	①　２/13（火）　～　３/４（月）	３/５（火）～３/19（火）
令和６年度	②　７/１（月）　～　７/22（月）	７/23（火）～８/６（火）
	③　11/11（月）　～　12/２（月）	12/３（火）～12/17（火）
	④　２/10（月）　～　３/３（月）	３/４（火）～３/18（火）

実施に当たっては、Microsoft formsを使用した。メタサポキャンパス内に、アンケートフォームのＵＲＬ及び二次元コードを掲示し、児童生徒に回答を呼び掛けた。アンケート内容は、アンケートの目的に基づいて、表３に示した項目、質問内容、回答形式で調査することとした。

表３　アンケート項目・質問内容・回答形式一覧

項目	質問内容	回答形式
属性	あなたは、小学生ですか、中学生ですか。	単一回答・２項目選択 小学生・中学生
他者とのつながり	他のアバター、担当スタッフ、キャンパスサポーターと、チャットや音声で話をすることができましたか。	単一回答・尺度選択（４段階） できた・まあまあできた あまりできなかった・できなかった

他者とのつながり	他のアバター、担当スタッフ、キャンパスサポーターとの関わりについて、満足していますか。	単一回答　尺度選択（10段階） １～10
学習とのつながり	学習への取組に満足していますか。	単一回答　尺度選択（10段階） １～10
安心感	メタサポキャンパス内での各活動を楽しむことができましたか。 （ｽﾀｰﾄﾀｲﾑ・ｲﾍﾞﾝﾄﾀｲﾑ・ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ・ｵﾝﾗｲﾝ配信のそれぞれについて回答。）	単一回答　尺度選択（４段階）＋α 楽しめた・まあまあ楽しめた あまり楽しめなかった・楽しめなかった 利用したことがない
	メタサポキャンパスは、あなたにとって安心してすごせる場所ですか。	単一回答　尺度選択（10段階） １～10

支援の充実に向けては、集計したアンケート結果を基に、その都度、担当スタッフが支援についての協議を行った。なお、アンケート調査以外にも、担当スタッフ間の情報交換や支援についての協議を行う場を月に１回程度設定し、支援の充実につなげた。

ウ　他者とのつながりに関する実践

メタサポキャンパスでの支援のうち、他者とのつながりに関する四つの実践について、その内容を紹介する。

(ｱ)　スタートタイム

スタートタイムは、担当スタッフが５分程度のスピーチを行い、それを聞いた児童生徒が質問や感想をチャットでリアクションを返すなど、対話中心の活動である。チャットが苦手な児童生徒は、エモート機能を使って自分の気持ちや考えを表現した。なお、エモート機能とは、アバターを操作して手を振ったり、拍手をしたりするなどの、自己表現の機能のことである。

児童生徒は、この活動を通して、自分自身の興味・関心の幅を広げ、担当スタッフとの交流を楽しみながら活動に参加できた。

(ｲ)　イベントタイム

イベントタイムでは、担当スタッフのアイデアを基にしたゲームやクイズを行った。また、ガイアタウン内の施設を使用してボートに乗ったり、スポーツをしたりするなど、体験活動も行った。児童生徒は、参加したイベントの中で、自己を表現したり、自分や他者の良さを発見したりするなど、人と関わる楽しさを感じていた。

(ｳ)　ワークショップ

ワークショップでは、昭和女子大学人間社会学部准教授森秀樹氏を外部講師として招へいし、プログラミング講座を開催した。児童生徒が作成したプログラミング作品を互いに作品を紹介し合うなど、他者と交流する場面も設けた。

(ｴ)　オンライン配信

オンライン配信では、広島、三重の両県の教育支援センターと連携し、児童生徒が動画配信を通して他者と交流する活動を行った。広島、三重の両県が企画した動画配信に、メタサポキャンパスの児童生徒が参加したり、メタサポキャンパスが企画した動画配信に、両県の児童生徒が参加したりするなど、県をまたいで交流を図った。メタサポキャンパスが企画した配信「みんなでやろや！オンラインキャンパス」では、愛媛プロレス道場、愛媛マンダリンパイレーツ、とべ動物園、松山税務署、株式会社母恵夢など、県内の様々な施設や企業と連携した動画配信を行った。

エ　学習とのつながりに関する実践

メタサポキャンパスでの支援のうち、学習とのつながりに関する五つの実践について、その内容を紹介する。

(ｱ)　ＩＣＴ教材「eboard」

ＩＣＴ教材「eboard」は、小学校４教科、中学校５教科、高等学校２教科（数学・英語）について、単元ごとの学習動画視聴、ドリル、単元テストが利用できる仕様となっている。児童生徒は、学年、教科、学習単元を自分で選択して学習に取り組んだ。ＩＣＴ教材「eboard」の特色は、８分程度の動画を視聴した後、ドリルや単元テストに挑戦することで、学習内容の定着を図ることができる点にある。メタサポキャンパスに登録している児童生徒には、ＩＣＴ教材「eboard」を利用する際の個人ＩＤとパスワードを付与している。クラウド上に保存された個人の学習記録（動画視聴状況、ドリル・単元テストの回答状況）は、毎月上旬に「学習状況報告書」として、教育支援センターで個人票を取りまとめ、在籍校に送付して情報共有を行っている。

(ｲ)　えひめ学習動画プラットフォーム

えひめ学習動画プラットフォームは、中学１年生、５教科の内容を学習できるＩＣＴ教材である。動画内容が、理解しやすく工夫されており、動画にリンクしたワークシートが添付されているので、要点整理をしやすいところに利点がある。

(ｳ)　桃太郎電鉄教育版

ゲーム桃太郎電鉄の教育版である。この教材は、教育関係機関においては無償で利用することができる。児童生徒の中には、桃太郎電鉄を使った学習を通じて都道府県名や県庁所在地、特産品等の知識が増え、社会科の学習に意欲的な姿勢で臨む者も見受けられた。本教材については、特に、小学生が多く利用している。

(ｴ)　スタディ道場

スタディ道場では、キャンパスサポーターによる30分間のミニ授業を配信した。キャンパスサポーターは、スライドやカメラ機能を使い、児童生徒が興味・関心を持つことができるように工夫しながら授業を行った。

(ｵ)　その他

上記(ｱ)から(ｴ)以外に、メタサポキャンパスに入室した状態のまま、自宅で問題集を使って学習したり、在籍校からの授業配信を端末で視聴したりするなど、メタサポキャンパス内の学習コンテンツによらない学習に取り組む児童生徒もあった。そうした児童生徒からは、「自分一人では学習が続かないけれど、メタサポキャンパスに入室して学習をすると、安心して学習に取り組むことができる」という感想を聞いている。

⑵　メタサポキャンパスでの実践の結果

ア　利用状況

表４　児童生徒の実人数及び延べ人数

	実人数	延べ人数
小学校	39人	720人
中学校	107人	2,856人
合　計	146人	3,576人

本年度12月末までの利用児童生徒の実人数及び延べ人数は、表４のとおりである。

実人数は、全体の24.8%に当たる39人が小学生、75.2%に当たる107名が中学生であった。

延べ人数の校種別の割合は、小学生が20.1%、中学生が79.9%であった。令和５年度以降、小学生、中学生ともに増加しており、今後も、メタサポキャンパスのニーズは高くなっていくと考えている。

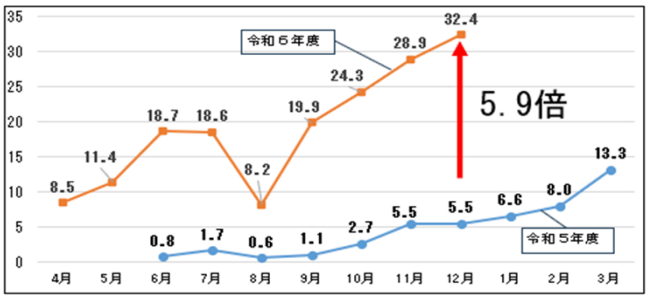

図１　１日当たりの平均利用者数(%)

１日当たりの平均利用者数（令和５年度及び令和６年度）は、図１のとおりである。令和６年度は、令和５年度よりも、１日当たりの平均利用者数が全体的に増加している。特に、12月末時点の数値においては、前年同月比が5.9倍であった。

児童生徒数の入室時刻別の割合は、図２のとおりである。

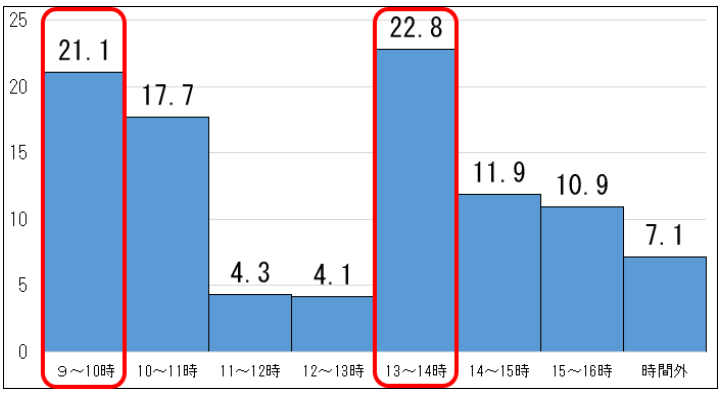

図２　入室時刻別児童生徒の割合(%)

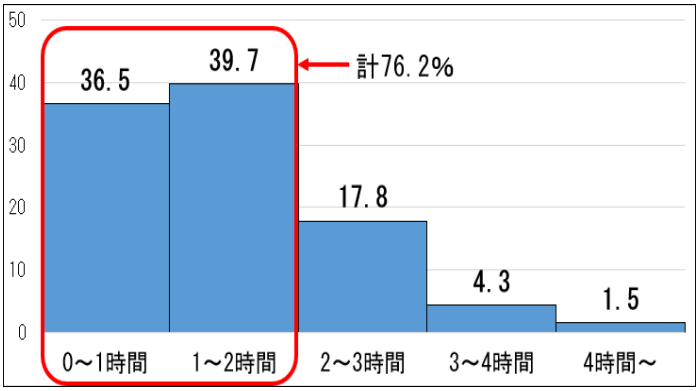

図３　滞在時間別児童生徒の割合(%)

入室時刻は、９時台と13時台が多くなっている。メタサポキャンパスの基本のスケジュールが午前と午後の２部制であることから、こうした傾向になっていると考えられる。

児童生徒がある決まった時刻にメタサポキャンパスを利用することは、児童生徒の生活習慣を安定させることにも役立っていると考えられる。

滞在時間別利用児童生徒数の割合は、図３のとおりである。

約76%の児童生徒の滞在時間が２時間以内となっている。オンラインを使った支援には、児童生徒の視力の低下という課題が想定されるが、担当スタッフは、児童生徒が長時間画面を注視し続けないように配慮している。メタサポキャンパスを利用している児童生徒は、基本のスケジュールに沿って、適宜、休息を取りながら、学習活動や各種活動に参加している。

図２、３からは、利用児童生徒の入室時刻や滞在時間に一定の傾向があることが分かった。こうした傾向からは、メタサポキャンパスが、起床や就寝時刻等が乱れがちな児童生徒の生活に一定のリズムを持たせる効果があると考えられる。

イ　他者とのつながりについての検証

表５　コミュニケーション方法の割合

	割合
チャット	67.1%
音声	29.4%
チャット音声でのやり取りなし	3.5%

児童生徒は、主に、チャット、音声、エモートの三つの方法で他者とのコミュニケーションを図っている。表５は、この三つの方法のうち、チャットと音声に着目してコミュニケーション方法の割合をまとめたものである。表５を見るとチャットが約67%と、最も多いコミュニケーションの方法であることが分かる。音声によるコミュニケーションを行っている児童生徒の中には、キーボードを使った文字入力がうまくできない小学生が多く含まれている。やり取りなしと示している3.5%の児童生徒のほとんどは、エモート機能を利用して他者とコミュニケーションを図っており、メタサポキャンパスを利用している児童生徒のほとんどは、入室後に三つのいずれかの方法で他者とつながりを持つことができている。

児童生徒が他者とのつながりを持つことができたかについて、令和６年２月、７月、11月に実施したアンケート結果から、他者とのつながりについて検証していく。図４は、「他のアバター、担当スタッフとチャットや音声で話をすることができたか」について、アンケート結果をまとめたものである。なお、他のアバターとは、他の児童生徒のことを指す。他者と話が「できた」「まあまあできた」という肯定的な回答は、アンケートの回数を追うご

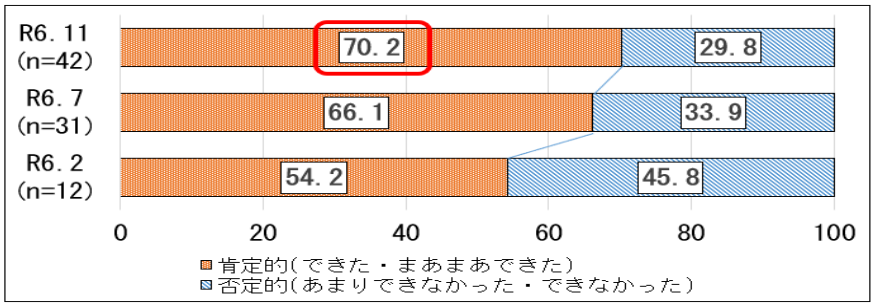

図４　他者と話ができたかについてのアンケート結果(%)

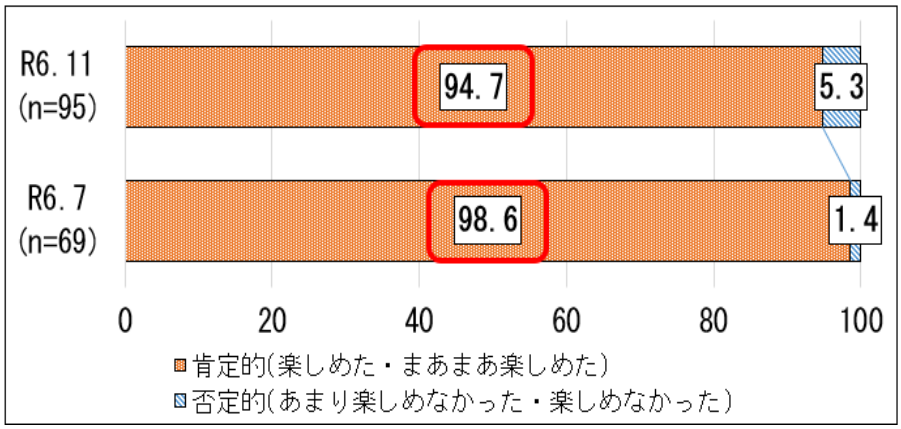

図５　活動を楽しむことができたかについてのアンケート結果(%)

とに数値が上昇しており、令和６年11月のアンケートでは、約70%の児童生徒がチャットや音声で話をすることができたと回答している。

また、児童生徒がコミュニケーションを図る場面としては、スタートタイムやイベントタイム、ワークショップを挙げることができる。こうした活動を楽しめたかについてのアンケート結果をまとめたものが図５である。これを見ると、７月、11月ともに「楽しめた」「まあまあ楽しめた」という肯定的な回答が90%を超えていた。特に、イベントタイムでは、他者と楽しみながら、チャットや音声でコミュニケーションを図っている場面が多く見受けられた。こうした、児童生徒が楽しみながら参加できる活動を充実させることが、担当スタッフや児童生徒相互のコミュニケーションの促進につながると考えている。

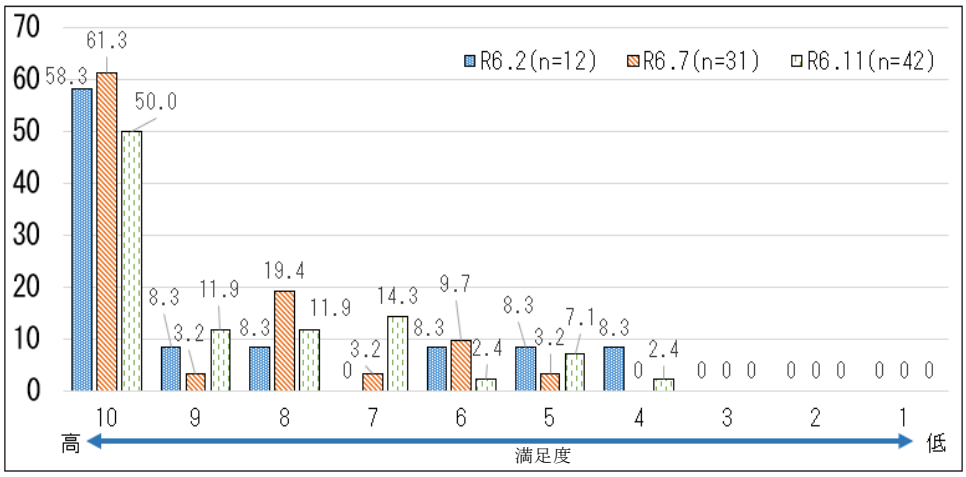

図６　他者とのつながりの満足度アンケート結果(%)

図６は、児童生徒の他者との関わりについての満足度をまとめたものである。50%以上の児童生徒が、最も高い満足度10を選択しており、満足度の中央値は、全３回のアンケートにおいて、9.5以上となっていた。このことから、児童生徒の他者との関わりについての満足度は高い水準であると捉えている。

ウ　学習とのつながりについての検証

メタサポキャンパス内で学習に取り組んだ児童生徒の割合は、令和５年６月から令和６年12月末までの期間において、平均67.5%であった。なお、メタサポキャンス内に設けた学習コンテンツの中で、最も利用が多かったのは、ＩＣＴ教材「eboard」であった。

図７は、学習に取り組んだ児童生徒の割合を月別にまとめたものである。メタサポキャンパス開設当初（令和５年６月から同年９月まで）は、学習コンテンツの充実を図っている過渡期であったこともあり、学習に取り組んだ割合は、約６%から33%と低い値であった。そうした状況を受けて、令和５年10月からＩＣＴ教材「eboard」をメタサポキャンパスに導入するなど、学習コンテンツの充

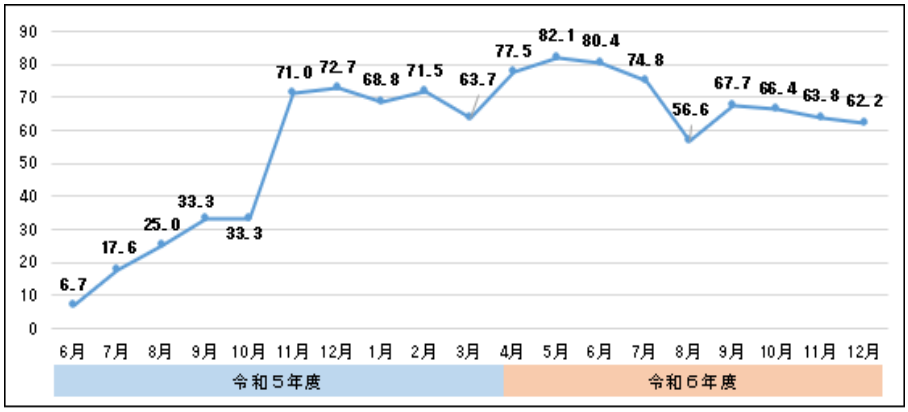

図７　学習に取り組んだ児童生徒の割合(%)

実を図ったところ、令和５年11月以降は、長期休業中を除いて60％から80％の児童生徒が学習に取り組むようになり、学習への取組状況は37ポイント向上した。ＩＣＴ教材「eboard」の学習動画の視聴状況やドリルの回答状況も良好であった。令和６年12月末の時点で、動画視聴本数は合計5,784本、ドリルの回答問題数が52,262問であった。

図８は、学習との関わりについての満足度をまとめたものである。全３回のアンケート結果を見ると、約35％から58％の児童生徒が最も高い満足度10を選択している。なお、11月のアンケート結果では、最も高い10を選択した児童生徒の割合が、７月アンケートの結果から15ポイント下がっている。アンケート結果を受けて実施した担当スタッフの協議では、11月のアンケート結果で数値が低下した要因としては、児童生徒自身が学習に気持ちが向いてないことや、取組が不十分であるといった、自分を責めるような感情があったことで低い値になっているのではないか、また、学習に取り組んだ児童生徒の全体的な割合が減少していることから学習の満足度が低下したのではないかといった意見が挙げられていた。

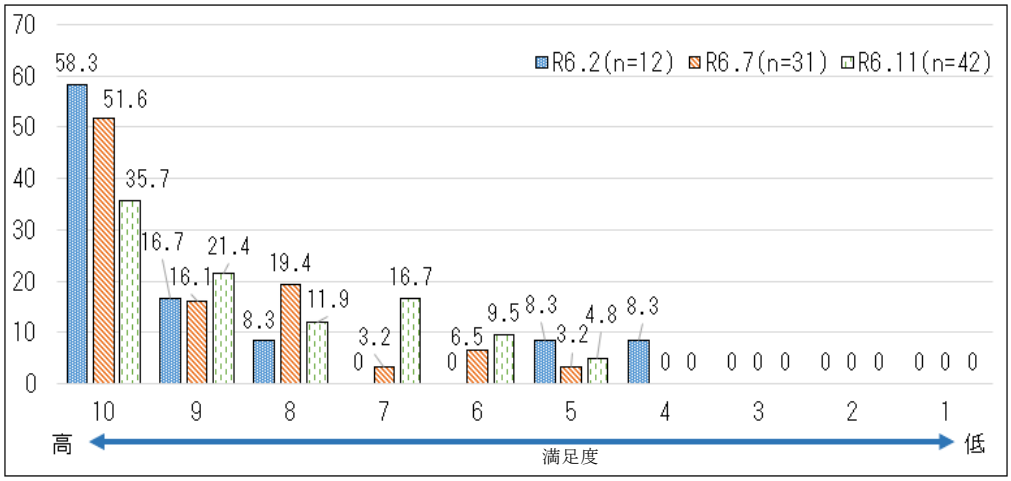

図８　学習との関わりについての満足度(%)

なお、数値が低下したことへの対応や改善策については、本稿のまとめで研究の課題として後述したい。

学習との関わりについての満足度の中央値は、全３回のアンケートにおいて９以上となっており、学習との関わりについての満足度は高い水準であると捉えている。

エ　他者や学習とのつながりの満足度とメタサポキャンパスでの安心感についての検証

図９は、メタサポキャンパスにおける児童生徒の安心感についてまとめたものである。

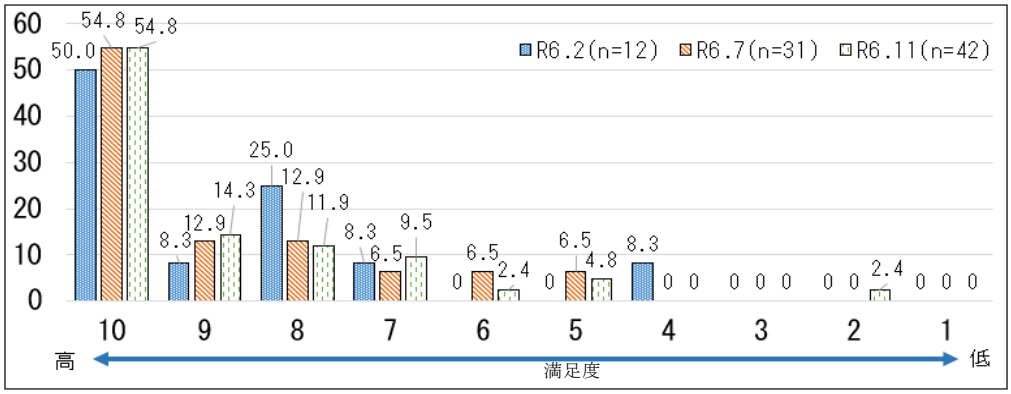

図９　メタサポキャンパスでの安心感(%)

全３回のアンケート結果のうち、児童生徒の50％以上が、最も高い10を選択しており、７月と11月の結果は、２月の結果と比較して、約５ポイント数値が向上していた。なお、11月のアンケート結果では、10段階のうち、２を選択した児童生徒がいた。アンケート実施後の担当スタッフの協議では、安心感を持つことができていない児童生徒もいるという意識を持ち、これまで以上に、児童生徒が安心感を持ってメタサポキャンパスで過ごすことができるよう、丁寧な声掛けや働き掛けをしていく必要があるという意見が挙がった。

メタサポキャンパスでの安心感の中央値は、全３回のアンケートにおいて、9.5以上となっており、メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感は、高い水準であると捉えている。

図10は、メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と、他者とのつながりの満足度の相関関係を調べるために作成した散布図である。これを見ると、データは、大きく右肩に偏っており、他者とのつ

ながりの満足度が高くなると、安心感の度合いも高くなる傾向にあることを読み取ることができる。メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と、他者とのつながりの満足度の相関係数は、0.65であった。このことから、メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と他者とのつながりの満足度には、正の相関関係があることを確認できた。

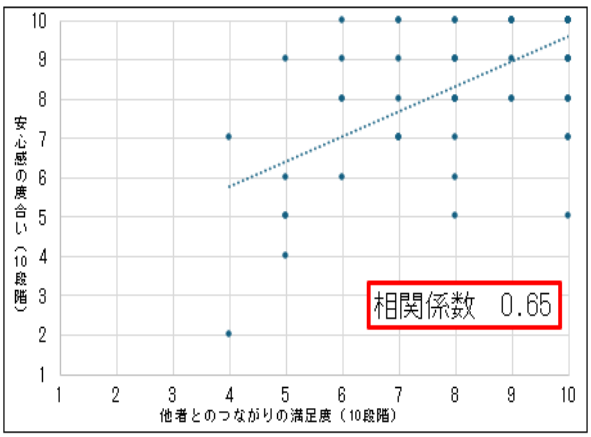

図10　安心感と他者とのつながりの満足感

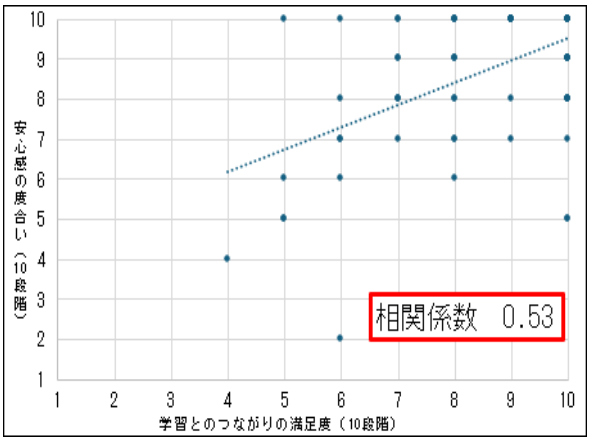

図11　安心感と学習とのつながりの満足感

図11は、メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と、学習とのつながりの満足度の相関関係を調べるための散布図である。メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と、学習とのつながりの満足度の相関係数は、0.53であった。このことから、メタサポキャンパスでの児童生徒の安心感と学習とのつながりの満足度には、正の相関関係があることが確認できた。

他者とのつながりについての満足度と学習とのつながりについての満足度の相関係数を比較すると、他者とのつながりについての満足度の方が0.12高い値となっていた。

３　研究のまとめと今後の課題

本研究の目的の一つである「メタサポキャンパスを利用する児童生徒が他者や学習とのつながりを持つことができたか」については、担当スタッフの観察による支援記録のデータやアンケート結果のデータの検証から、児童生徒に、他者や学習とのつながりを持たせることが、おおむねできたと捉えている。

他者とのつながりを持たせられたことについては、担当スタッフが児童生徒理解を深めながら、その都度、ニーズに合わせて取組を工夫したことで、実践の効果が高まったと考えている。また、学習へのつながりを持たせられたことについては、オンラインで取り組むことのできる学習コンテンツの充実や、児童生徒への担当スタッフによる日々の関わりにより、実践の効果が高まったと考えている。

また、「他者や学習とのつながりがどの程度であったか」については、アンケート結果から、他者とのつながり、学習とのつながり、メタサポキャンパスでの安心感が、全て高い水準の満足度であった。このことから、メタサポキャンパスでの支援が、不登校児童生徒への支援として効果のある手立てであることを確認できた。

このように、高い満足感や安心感を得ることができたのは、メタサポキャンパスでの支援の充実に向けて、担当スタッフが、支援記録のデータを参照しながら具体的な支援策を協議するなどして、常に取組の改善を図った結果が効果として反映されたと考えている。

データに基づいて取組内容の改善を図ったことについては、国立教育政策研究所『ＰＤＣＡ×３＝不登校・いじめの未然防止－点検・見直しの繰り返しで、全ての児童生徒に浸透する取組を－』の研究報告書に示された考え方を参考にしている。この研究報告書では、全国の指定地域において、生徒指導に係るＰＤＣＡサイクルを年度間に３回行い、各学期の学校での取組の効果を高めるための実践事例が具体的に示されている。実際に、各指定地域において成果のあった取組であることに加え、取組内容が簡潔で導入しやすいという利点があったため、メタサポキャンパスで支援の充実を図る具体的な手立てとして参考にした。

他者や学習とのつながりの満足度とメタサポキャンパスでの児童生徒の安心感に正の相関関係が見

られた。「他者や学習とのつながりの満足度」や「安心感の度合い」は、それぞれが独立したものではなく、相互に関係性を持ちながら高まっていくと考えられる。不登校児童生徒の支援においては、児童生徒の安心感を高めるために、それぞれが欠くことのできない重要な要素であると考えている。メタサポキャンパスでの支援において、他者や学習とのつながりの満足度と、安心感に相関関係が確認できたという本研究の成果は、学校教育の現場においても一般化できるのではないかと考えている。各学校においても、児童生徒の学力向上に向けての授業改善や、児童生徒の居場所づくり、きずなづくりの推進が、児童生徒の学校や教室での安心感の向上につながるのではないだろうか。

本研究の課題について、メタサポキャンパスを利用している児童生徒の多くが、他者や学習とのつながりを持ち、満足度や安心感の度合いが高かった一方で、そうではない児童生徒も一定数いると捉えている。

今後は、定期的なアンケートの実施や、児童生徒とのやり取りの中で、メタサポキャンパス全体と児童生徒一人一人を丁寧に観察し、実態把握に努めたいと考えている。そして、把握した実態に基づいて担当スタッフで協議をし、支援の充実を図っていきたいと考えている。

また、学習とのつながりの満足度を調査した11月のアンケート結果では、満足度10を選択した児童生徒の割合が前回アンケートよりも15ポイント低下しており、児童生徒のニーズを調査し、学習コンテンツの充実を図っていく必要性があると考えている。また、学習への取組に抵抗感がある児童生徒も在籍していることから、担当スタッフのより丁寧な児童生徒への関わりも重要であると捉えている。

11月のアンケート結果を受けて、同月下旬には、スタディ道場による学習支援をスタートさせた。これまでの動画視聴による自主学習のみならず、キャンパスサポーターが、直接、児童生徒の支援に当たることがスタディ道場の特色である。この取組については、第４回のアンケート結果を見て、その内容を検証したいと考えている。

メタサポキャンパスでは、今後も、アンケート調査等で定期的に児童生徒の声を聞きながら、担当スタッフ間の協議を通して支援の充実を図っていきたい。

主な参考文献

〇文部科学省「令和５年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」2024
〇文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（ＣＯＣＯＬＯプラン）」2023
〇国立教育政策研究所『ＰＤＣＡ×３＝不登校・いじめの未然防止－点検・見直しの繰り返しで、全ての児童生徒に浸透する取組を－』2017